

ジャン・ド・トロワ『醜聞年代記』抜粋 — ルイ 11 世治世時代のブドウ収穫・ワイン消費状況 —

影山 緑子

[解説]

シャルル7世末期からルイ11世の治世、1460年から1483年までの事績を記録したジャン・ド・トロワ JEAN DE TROYES の回想録は、通称『醜聞年代記』*Chronique scandaleuse* と呼ばれている。しかし、この回想録を記したとされる15世紀の年代記作者ジャン・ド・トロワの生涯はほとんど知られていない。プティト版(1820年)やビュション版(1875年)によると、作者はクリスティーヌ・ド・ピザンの息子ジャン・カステルではないかとの説もあったが、ジル・コロゼが1583年『フランス史宝典』*Le Thresor de l'Histoire de France* 出版の際に文献目録に明記した、ジャン・ド・トロワ作との説が有力になった¹。その後1611年、1620年の刊本『醜聞年代記』によって、おそらくパリ市役所の書記官を努めていたのではないかと推測されている。一方、年代記中に「畏れ多き奥方」*ma tres-redoubtee dame* と形容されているジャンヌ・ド・フランスは、シャルル7世の長女、ルイ11世の姉妹の一人、またブルボン公の妻であり、1482年に没したとあるが、作者はこのブルボン公妃家に仕えていたのではないかと考えられている²。

本稿では、19世紀に刊行された回想録・年代記集のうち同作品の掲載が最も古いとみなされるプティト版のブドウ収穫とワインの消費状況に関する記述を抜粋し、訳出した。同作品プティト版と、これを継承したビュション版は、他の回想録や年代記と共に編修されている。ちなみに19世紀ヴィクトル・ユゴーが『ノートルダム＝ド＝パリ』(1831年初版)の冒頭部分でジャン・ド・

¹ GILLES CORROZET, *Le Thresor des histoires de France redvites par Titres, partie en forme d'annotations, et partie par lieux communs*, Paris, Galiot Corrozet, 1583, p. 103. « Source gallica.bnf.fr. / Bibliothèque nationale de France »

² JEAN DE TROYES, *Les chroniques du tres chrestien et tres victorieux Louys de Valois, feu roy de France (que Dieu absolve) unzieme de ce nom*, 1^{ère} partie, éd. Claude-Bernard Petitot, Paris, Foucault, 1820 (Collection complète des mémoires relatifs à l'histoire de France, 1^{ère} série, 13), p. 239-246 ; *id.*, *Les chroniques du tres chrestien et tres victorieux Louys de Valois, feu roy de France (que Dieu absolve) unzieme de ce nom*, 2^{nde} partie, éd. Claude-Bernard Petitot, Paris, Foucault, 1820 (Collection complète des mémoires relatifs à l'histoire de France, 1^{ère} série, 14), p. 47, p. 101. N. B. 各巻、以下次のように略記する : *Chronique scandaleuse*, éd. Petitot, t. 13, *op. cit.* 及び *Chronique scandaleuse*, éd. Petitot, t. 14, *op. cit.* ; JEAN DE TROYES, « Chronique de Louis XI, de 1461 à 1483 » in *Choix de chroniques et mémoires relatifs à l'histoire de France*, éd. Jean Alexandre C. Buchon, Orléans, H. Herluison, 1875 (Panthéon Littéraire), p. X. « Source gallica.bnf.fr. / BnF. »

トロワの名と共に引用したイタリック体部分³は、今回参照した19世紀の刊本とは若干異なる。また、数々の刊本『醜聞年代記』の中で、後のド・マンドロ版（1894年）には、バリエーションについての詳細な註が施されている。ド・マンドロは、写本 Paris, BnF. fr. 5062 の末尾にある花押から、同年代記中に記載のある、ブルボン公ジャン2世に仕えた秘書官、またブルボン邸守衛のジャン・ド・ロワ JEAN DE ROYE の作品ではないかと述べている⁴。三つの版に共通することだが、1478年3月白衣の主日（復活祭後の第一日曜日）*Quasimode* 後にオルレアン公一行がパリに入市した際に、ジャン・ド・ロワの名前と職種は、二度目のブルボン邸での宴会の場面で明らかにされる⁵。

『醜聞年代記』には、シャルル7世治世末期からルイ11世治世下の政治・外交状況の他に、自然環境の記載と共にブドウの収穫状況やワインの価格が詳細に報告されている。特に、1465年のワインは、ブドウの完熟前に収穫したため、品質が悪い年度として、「ブルゴーニュ公国軍の年」と呼ばれていた⁶。現代では数々の銘醸地ワインで有名なブルゴーニュ地方だが、なぜこうした評判が立つに至ったのだろうか。本解説では、同年代記におけるワインの生産状況と価格変化を通し、客人をもてなすツール、または軍人の英気を養う供給品としての役割を、年代に沿って概観する。

最初に、プティト版のタイトルと序文について、触れておく。

³ VICTOR HUGO, *Notre-Dame de Paris*, t. 1, Paris, Charles Gosselin, 1831, p. 3-4. 冒頭1482年1月6日公現祭と舞台設定の日を限定した部分において、イタリック引用文の一節「大層派手な教訓劇、ソチ、笑劇」*moult belle moralité, sottie et farce* は、当研究で参照したプティト版や他の版でも『醜聞年代記』に該当する部分がある。Cf. *Chronique scandaleuse*, éd. Petitot, t. 14, op. cit., p. 111. しかし、もう一方のイタリック体一節「パリ中の庶民を沸き上がらせていた」*mettait en émotion tout le populaire de Paris* は、直後にジャン・ド・トロワの名が引用されているにも拘らず、『醜聞年代記』に完全に一致する部分が見当たらない。

⁴ JEAN DE ROYE, *Journal de Jean de Roye connu sous le nom de Chronique scandaleuse 1460-1483*, éd. Bernard de Mandrot, t. 1, Paris, Renouard, 1894, p. XXIV-XXIX. バリエーションについては、以下参照。Ref. éd. de Mandrot, t. 2, p. 139-400.

⁵ 「1478年3月白衣の主日（復活祭後の第1日曜日）の後、[...] オルレアン公夫人の一行はパリ市で2回にわたって催された大宴会でもてなされた。1回目は、バスティーユ近くのエスタンプ邸にて、フエ枢機卿により開催された。2回目は、ブルボン枢機卿がパリ市の自邸で開催し、オルレアン公夫人、その一行や多くのお付きの者たちに夕食を振る舞った。1478年3月31日火曜日のことである。この日の夕食はかなり立派なもので、ふんだんな量があり、当時見つけることのできるあらゆる料理が優雅に供されたのだった。さらに、歌手達や耳に心地よい多数の楽器の他に、笑劇や茶番劇、その場に相応しい他の余興が添えられていた。金細工が施された回廊には、大層ふくよかなネルボンヌ夫人殿が夫君と楽に付けるように夕食のテーブルが配置された。ブルボン公殿の秘書官及びブルボン邸守衛であるジャン・ド・ロワの母屋にあるブルボン邸階下の部屋では、8名まで夕食をとることが出来た。」(*Chronique scandaleuse*, éd. Petitot, t. 14, op. cit., p. 70-71.) Cf. JEAN DE TROYES, « Chronique de Louis XI, de 1460 à 1483 », éd. Buchon, op. cit., p. 336-337 ; *Journal de Jean de Roye, Chronique scandaleuse 1460-1483*, éd. de Mandrot, t. 1, op. cit., p. 67-68.

⁶ *Chronique scandaleuse*, éd. Petitot, t. 13, op. cit., p. 306.

タイトルと序文について

プティト版の文頭を飾る題辞は、目次にもある、先に述べた通称『醜聞年代記』*Chronique scandaleuse*ではなく、以下のような詳細な説明を含んだ敷衍された題名である。

LES CHRONIQUES DU TRES CHRESTIEN ET TRES VICTORIEUX LOUYS DE VALOIS,
FEU ROY DE FRANCE QUE DIEU ABSOLVE UNZIESME DE CE NOM. AVECQUES
PLUSIEURS AULTRES ADVENTURES ADVENUEES TANT EN CE ROYAULMES DE
FRANCE, COMME ES PAYS VOISINS, DEPUIS L'AN 1460 JUSQUES EN L'AN 1483
INCLUSIVEMENT.

いとも信心深いとも勝利に栄えたヴァロワ朝ルイ、神が赦し給う亡きフランス王、ルイ十一世年代記集。1460年から1483年まで、フランス王国同様、近隣諸国で起こった諸出来事を含む⁷。

冒頭は、神と聖母マリアへの賛美が差し向けられる。その力添えがなければ、どんな善行も導かれることはない。次に在俗の王侯貴族や聖職者によって、歴史上の事件や種々の場所で起こる出来事が好んで聴かれることを述べた後、年代記作者自身のことが次のように語られる。

私は、35歳の時には、無為に時を過ごしたり、怠惰を避けるために、うろ覚えの事のように、フランス王国や近隣諸国に起こった多数の出来事を記したり、記録することを楽しんでいた⁸。

年代記の期間は、タイトルにも示されていたが、シャルル7世が統治していた1460年に開始され、シャルル7世の息子ルイ11世が王位を継承し、ルイ11世が死去した1483年の8月30日までを網羅している。プティト版では、ルイ11世を指し示す語には、普通名詞を固有名詞化した、頭文字が大文字のRoy（王）を使用している⁹。作者は必ずしも当作品が「年代記」と呼ばれることは望んでおらず、命じられたわけでもなく、許可されたわけでもない。お抱え年代記作家ではないのである。作者は読者や見聞きする者にささやかな時間つぶしを提供するために作品を記した、と述べている。謙虚を表現するレトリック¹⁰によって、無知や誤りについて予め謝りの文

⁷ *Chronique scandaleuse*, éd. Petitot, t. 13, op. cit., p. 464, p. 247.

⁸ *Ibid.*, p. 247-248.

⁹ 本稿の拙訳では、Roy を単に「王」と訳したが、ルイ11世のことを指し示している。

¹⁰ Cf. Ernst Robert Curtius, *La littérature européenne et le Moyen Âge latin*, éd. française traduite par Jean Bréjoux, Paris, P. U. F., 1956 [Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter, 1948], p. 103-106 (1954

言を加え、前代未聞の出来事を前に当時の真実を完全に記述するのは、誰であろうと困難であつたろうと、理由と一種の口実も付け加えている。

『醜聞年代記』におけるブドウの収穫、ワインの消費状況概観

ワインに着目した場合、次のように、大きく3つの時期に分けられる。

1－紛争下のワイン：1460年－1465年

1461年7月22日に没したシャルル7世の時代に百年戦争は終わったとは言え、1461年8月7日にランスで正式にフランス王国を継承したルイ11世¹¹の治世に移行しても、王国と近隣公国間の内戦は絶えなかった。しかし、序文の後、こうした政治状況や戦況の前に、まず1460年のフランス王国のテロワールの状況説明から『醜聞年代記』は始まる。1461年のシャルル7世からルイ11世への継承、いわゆる王位継承は、パリの国王入市式などを経て比較的穏やかに行われたと見られる。1463年は気候も穏やかで、ワインの生産に向いていた。

一方、1465年は戦費が嵩む中、ルイ11世はワインの小売り、卸売り価格や、ワインの供出について管理を始めた。また、良いワインは諸侯間の贈り物としても選ばれている。1465年のパリ周辺で、ブルターニュ公国軍とブルゴーニュ公国軍によって始められたブドウの収穫は、時期尚早であった。その結果、ヴィンテージワインとは逆の効果を持つ、あまり好ましくないワインが生産された。この年、収穫年度の呼び名「ブルゴーニュ公国軍の年」が付けられることになる。この件に関しては、ルイ11世とベロン検察官の会話が続くが、ブドウそのものや収穫年度内に飲まれる熟成前の早飲みのワインがあまりパリでは評価されていなかったことが推察される。1465年最後のワインに関する記述では、疲弊したブルゴーニュ公国軍とブルターニュ公国軍の兵士に休戦協定後にパンとワインが供給される。ここでは、ワインとパンは組み合わせられ、基礎食品として組み込まれる。

こうして、明暗両面を含んだワインの特性を代表する1465年度を経る。

2－銘醸地産ワインへの注目：1466年－1479年

次に、1466年以降1479年までのワインに関する政策を、年代順に要点を述べる。

1466年はブドウ収穫にとって、必ずしも天候には恵まれなかった。しかし、1467年9月1日

年独語版和訳：E. R. クルツィウス著、南大路振一、岸本通夫、中村善也訳『ヨーロッパ文学とラテン中世』みすず書房、2005年、117-118頁）及び拙論：Midoriko Kageyama, « Formules de modestie dans le *Quadrilogue invectif* d'Alain Chartier » in *La Formule au Moyen Âge*, dir. Elise Louvriot, Turnhout, Brepols, 2012, p. 78-79.

¹¹ *Chronique scandaleuse*, éd. Petitot, t. 13, op. cit., p. 256-259.

火曜、王妃とその一行が船に乗ってパリに入市した際には、ワインが船内の優雅な入市式のセレモニーにおける美味の要素の一部として給仕されたことがわかる。また同様に、同年9月14日には、幟を掲げた観閲式の際に、大量のワイン樽が空けられて、行進のコースもワイン生産に関する箇所が含まれている。

一方、ブルゴーニュ公国軍に立ち向かうため、1472年にボーヴェ住民や諸侯に贈られたワイン、特に休戦中に贈られたオルレアン・ワインは、銘醸地ワイン *vin de cru* として限定されており、紛争下とは言え、すでにワインの選別化が顕著に表われる。1473年の悪天候で生産されたワインも、出来の悪いワインは廃棄されている。ワインは取捨選択されて、良質なものが選ばれ、1475年にはイングランドを中心とした国外への輸出が推奨されている。

1465年には、メーヌ伯からベリー公への贈り物としてボヌワインが記載されていたが、1478年にも、ボヌワインはパリの商人から評価されて、購入されていたことがわかる。ボヌ市は敗北の代償として、ワインを供出することになる。紛争中ではありながら、ワインが選別化されて、戦費の一部に組み込まれると同時に、一種の和平への糸口となっていく。

3-ワインの小売価格の高騰と探求：1480年－1483年

その後の1480年からルイ11世治世最後の年を検討する。ブドウ畑を取り巻く自然環境は、1480年も芳しくはない。1481年もワイン生産量は少なかったが、需要が伸びているためであろう、ワインの小売価格は高騰した。パリの商人は良質のワインを求め、遠隔地、ついにはスペインまで赴く。

『醜聞年代記』には、その名と異なり、ルイ11世が泥酔したと言った記載は全くない。一方、イングランド王エドワード4世に関しては、1483年に毒にも薬にもなるワインの弊害によって、亡くなったことが記されている。

ルイ11世治世時代のワインは、兵士や戦費のための戦いを促進する必需品及び補給品でありながら、一方で入市式や贈り物に用いられる、友和のための付加価値を持つ嗜好品としての役割も持つ。こうしたワインの特質は、ブドウの早摘みと早飲みによって、不運にも評判を落としてしまった「ブルゴーニュ公国軍の年」と、年代記を通して模索される和平の実現と同様、少しずつ熟成する銘醸地ワインの年数との対比と類似する。ワインのテロワールの記述から始まり、数カ所の銘醸地ワインに触れる当年代記では、王国の防衛がワインの生産地を守ることと結びつけられている、と考えるのは行き過ぎであろうか。

尚、抜粋翻訳した中代仏語『醜聞年代記』プティット版は、以下のようにプティット編『フランス歴史に関する回想録叢書 I』の13巻、14巻に掲載されている。原本に最も近いとされる年代記の1611年刊本を底本としており、15世紀の王立図書館旧番写本 9689（現写本 Paris, BnF. fr. 2889）と校合されている。

JEAN DE TROYES, *Les chroniques du tres chrestien et tres victorieux Louys de Valois, feu roy de France (que Dieu absolve) unziesme de ce nom*, éd. Claude-Bernard Petitot, Paris, Foucault, 1820 (Collection complète des mémoires relatifs à l'histoire de France, 1^{ère} série, 13 et 14).

1^{ère} partie : t. 13, p. 237-456 (1460 年－ 1474 年) ; 2^{nde} partie : t. 14, p. 1-118 (1475 年－ 1483 年) ¹².

〔翻訳〕

以下、ブドウ、ワインに関する記述を時系列に沿って引用・翻訳する。尚、年月日は復活祭の期日算定に従って記載されており、現代の暦と異なる年、及び年度の抜けている引用には適宜補足した。また、単位についても現代の表記と照合し、一部括弧内に付け加えている。

1 :

まず、1460 年の土地の状態と有益性に関して。フランス王国のテロワール ¹³ と生産区域に関する限り、良質の保存の効く小麦が適度に育ったが、同年 1 スティエ（小麦の旧容積単位）パリ鑄造硬貨 24 スー以上の高値で売れることはなかった。だが、果実に至っては、ごくわずかの収穫しかなかった。ブドウ畑についても、ワインの生産量はわずかであり、特に イル＝ド＝フランスでは、1 アルパン（土地の面積の旧単位、約 19 アール）毎に 1 ミュイ（旧容積単位、ワインに関しては約 268 リットル、またはその容積の樽）のワインが生産されたが、かなり上質のものであった。パリ周辺の銘醸地産ワインは高価で売却された。売却価格は 1 ミュイが 10 から 11 エキュであった ¹⁴。（下線は筆者）

翌年 1463 年に関しては、上記で述べたと同様、大きく記憶に残るようなことは全く起きなかった。とは言え、冬は暖かくて短く、夏は長かった。この年は十分な量と質のワインが生産された。他に豊かな地の利には恵まれなかったが、海の幸は豊富であった ¹⁵。

1465 年 8 月 3 日土曜日、王（＝ルイ 11 世）はパリ市とパリの住民に施したいという格別な欲求を抱いて、市におけるワインの小売り額にかける税を 4 分の 1 から 8 分の 1 に

¹² « Source gallica.bnf. fr. / Bibliothèque nationale de France ». 尚、各引用の拙訳箇所には、脚注に当該原文の頁を記載した。

¹³ 「テロワール」の語義は、ワイン用のブドウ栽培の土地に関して使用する場合、土壌のみではなく、気象・地勢など栽培条件も含む。フランスワインにとっては、現代では工場生産のワインと比較され、重要な意味を持つ。Ref. Jean-Robert Pitte, *Bordeaux Bourgogne, Les passions rivales*, Paris, Hachette Littérature, 2005, p. 8 及び岩科司総合監修『ワイン展 ― ぶどうから生まれた奇跡 ― 』、国立博物館・読売新聞社、2015 年、19 頁。

¹⁴ *Chronique scandaleuse*, éd. Petitot, t. 13, op. cit., p. 248-249.

¹⁵ *Ibid.*, p. 264.

変更するよう定めた。特権階級全ての者が特権を享受することを望んだのである。まさに、故シャルル（7世）の生存中に行われた政策と同様である。

さらに、市内で流通していたあらゆる税額が下げられるよう王は命令したが、パリの6カ所の農場で卸売られていた以下の商品は除く。すなわち、ブッシュ農場、ピエ＝フルシェ農場、卸売り生地、卸売りワイン、海洋魚等である¹⁶。

翌日1465年9月2日月曜日、王の邸宅前にパリで居を構えていたメーヌ伯殿はベリー公殿に、鮮紅色のワイン2ミュイ、ボーマワインを1.5ミュイ入り樽半分の4樽分とリング、キャベツ、カブを背負った馬一頭を贈った。さらに翌日火曜日には、王とブルゴーニュ公国派の代理として紛争について報告するため、使者が任命されて選任された。すなわち、王の代理として、上記のメーヌ伯殿、会計検査院プレシニー院長、トゥルーズ高等法院ジャン・ドーベ院長が選出されたのである¹⁷。

（1465年）9月9日月曜日、ブルターニュ公国軍とブルゴーニュ公国軍の兵士達が、パリ周辺のクリニヤンクール、モンマルトル、ラ＝クルティーユのブドウ産地や他のブドウ畑に、ブドウは全く熟していないにもかかわらず、残らず収穫するためにやって来て、飲料用の平凡なワインを生産した。それゆえ、パリの人々もパリ周辺の至る所で、半分も熟しておらず、むしろ収穫時には適していない残りのブドウを収穫せざるを得なかった。この年度こそ、フランスで長い間知られることとなった最も不運な年であり、収穫量にも恵まれず、「ブルゴーニュ公国軍の年」のワインと呼ばれていた¹⁸。

王は安全に帰途に向かうため、人質としてメーヌ伯殿を残し、サン・ポール伯殿が戻るまで、ブルゴーニュ公国の軍隊に逗留させた。同日戦場から帰還した王は、サン＝タントワヌ橋で出迎える多くのパリ諸侯に、ブルゴーニュ公国軍は今までのような苦痛を今後諸君に与えることはないであろう、また斯様なことのないよう見張っていくつもりであると述べた。その時ピエール・ベロンという名のシャトレ裁判所検察官が王に次のように返答した。「ごもつともですが、殿下。しかし彼ら（＝ブルゴーニュ公国軍）は回復できないほど当地のブドウを収穫し、果実を食べているのです。」すると、王は反論した。彼らがワイン倉庫や地下倉でこっそり貯蔵していたもの（＝ワイン）を大量に摂取しにパリ市内にやって

¹⁶ Ibid., p. 290. Cf. *Journal de Jean de Roye, Chronique scandaleuse 1460-1483*, éd. de Mandrot, t. 1, op. cit., p. 76-77.

¹⁷ *Chronique scandaleuse*, éd. Petitot, t. 13, op. cit., p. 304-305.

¹⁸ Ibid., p. 306.

くるよりも、当地のブドウを収穫し、果実を食べてしまう方がよいではないか、と¹⁹。

サン＝タントワヌ＝デ＝シャン近郊のブドウ畑の中で、カラブリアとブルゴーニュ公国の20名から24名程のごろつき兵達が全裸の無防備な状態で捕えられて、全員戦利品として売られたのだった。4名に対して1エキュが代価として支払われた。それはパリ鑄造硬貨6スー6ドゥニエに相当する²⁰。

翌金曜日には、2名の副伝令官がパリにやって来た。一人目ジゾールの副伝令官は当地に援軍を送るようにと、王（＝ルイ11世）に進言にしにやって来た。なぜなら間近に5、600隊の槍騎兵隊がいたが、その中には王に味方する戦士はいなかったからである。また、大砲や火薬、他の防備もなかった。もう一人の副伝令官は、ラ・バルド侯の軍隊の下で任務を行う騎兵隊盾持ちユ・デ・ヴィーニュから、王の許へと派遣された。ユ・デ・ヴィーニュは当時ムーランにいたが、信頼できる筋からの情報によると、ブルターニュ公国軍と他の者たちがポントワーズで行ったようにルーアン入城を企てており、城あるいは宮殿内部に軍を配備されるよう、とこの副伝令官から王に伝えられた。同日金曜日には、各陣営から命じられてやって来たこの使者たちは、パリ市外のサン＝タントワヌ＝デ＝シャンで食事をした。そこでは、王からパン、ワイン、魚と食事に必要なものは全て運ばれた²¹。

(1465年)10月1日火曜日、王と諸侯の期限なしの休戦協定が公布されて、翌日にはサン・ポール伯殿がパリにやって来て、王と会食をした。(サン・ポール伯殿は)パリの宮殿広間に行くと大理石のテーブルにつき、フランス大元帥に任命された。さらに、通常任命時に行われる宣誓が行われた。同日王命により、ブルゴーニュ公国とブルターニュ公国の兵士達の食糧や衣類を補給するために、各自が食糧や必需品を持ってくることを、以上のことが行われるように、との布告がパリでなされた。布告があるや否や、多くのパリの商人が大量の食糧をサン＝タントワヌ前の広場に持って来た。この食糧は四方八方から集まってきた軍の兵士達に大層歓迎されて、兵士達は食糧、とりわけ彼らのために特別作られたパンやワインを買っていた。なぜなら、兵士達はこれ以上耐えられないほど長い間続いてきた苦難のために、頬は毛むくじゃらでかなり垂れ下がっており、すっかり飢えていたからである。大多数の兵士は、靴もスリエ（華奢な短靴）も履いておらず、シラミと悪臭があふれていた²²。

¹⁹ Ibid., p. 307-308.

²⁰ Ibid., p. 310.

²¹ Ibid., p. 316-317.

²² Ibid., p. 319-320.

2 :

1466 年はかなり湿度が高かった。フランス各地で良質な小麦が育った。一方、他の土地では、育った小麦は価値が低く、虫害で枯れてしまった。さらに、各地で強力な嵐が起こり、雷、強風、大雨と同様稲妻や暴風雨によって、王国の各地で甚大な損害と被害をもたらした。特にスワソネ地方では、嵐が小麦やブドウ全て、その他の果実に被害を及ぼし、美しい家並みや邸宅、教会の屋根の多くを破壊し、他にも数々の損害をもたらした²³。

(1467 年) 9 月 1 日、王妃もまた船でセーヌ河を上りパリに到着すると、ノートルダムの地に上陸した。[…] 迎える船の中には、サント＝シャペル聖歌隊の小さな子供達が乗っており、美しいヴィルレー、シャンソンや牧歌詩を大層調子よく吟じていた。さらに、その他多数のラッパ奏者、トランペット奏者、聖歌隊歌手、種々の高低音楽器奏者がおり、一斉に各パートで心地よいメロディーを奏でていた。その時、王妃と貴婦人たちが、船に乗り込んだのであった。船の中には、パリの豪商によって、貴き王妃の紋章を首に下げ、砂糖漬けの菓子で出来た美しい鹿の置物が展示されていた。他にも室内用香料や綺麗な砂糖漬けの菓子が詰まった、複数のドラジェの飾り鉢が置いてあった。また、多種類の新鮮な果物が大量に並べてあった。船の真ん中には香しいスマイレの花がばらまかれていた。まもなくそこで、ワインが好きなだけ提供されて、配られた²⁴。

(1467 年) 9 月 14 日月曜日、前述のようにパリ中の幟を掲げるよう命令していた王は、同日パリ市の住人は皆パリ市外の戦場に向かうため身支度するように、との王令を発布させた。[…] さてパリ市外では、数カ所に多数のワイン樽を運ばせるよう命令が下った。広範囲の地方を網羅していた観閲式の兵士達全員に飲ませて英気を養わせるよう、その場でワイン樽は空にされた。なぜなら、彼らは全員サン＝タントワヌ門とタンブル門間の道路の末端から始まるジグザク行進に参加していたからである。パリの堀から川上に上り、この道路の前のワイン压榨場まで至り、そこからサン＝タントワヌ＝デ＝シャンまでブドウ畑に沿って行進は続き、その後、サン＝タントワヌ＝デ＝シャンの城壁に沿って、リュウイの穀物庫まで、この穀物庫からコンフランに達する。そして、コンフランからメルシエ街にある穀物庫を経由して、セーヌ河沿いにビリイ塔のある王の塁道に至る²⁵。

この間に王の良き都市パリの人々から救助が届いた。歩兵、ツルハシ、スコップ、小麦、ワイン、火薬や他の補給品であるが、この都市（＝ボーヴェ）の戦士や住民にとって

²³ *Ibid.*, p. 345. Cf. éd. de Mandrot, t. 1, *op. cit.*, p. 163.

²⁴ *Ibid.*, p. 354-355. 1467 年 9 月 1 日、王妃の船上の入市式の様子である。

²⁵ *Ibid.*, p. 357-358.

は、大助かりであった。こうした状況下で、大規模な紛争が起こり、ボーヴェに接近していたブルゴーニュ公国の兵士の多くは亡くなったり、殺されたりした²⁶。

この突撃から（1472年）7月21日まで、軍にはほぼ何事もおきなかった。その日（7月21日）には、オルレアン市の善良な市民、町民、住民が、100樽ものオルレアンの銘醸地ワインを、パリ市内を通して運ばせた。このワインはボーヴェに在留していた諸侯や兵士に、英気を養わせ、ブルゴーニュ公国軍に立ち向かうために必要な分を補給しようと贈られていたのである²⁷。

その年（1473年）の環境と天候に関して述べると、夏は格別猛暑となり、6月から12月1日まで続いたのである。当時生きている人間が生存中にかつて経験したこともないほどの猛暑と灼熱であった。それゆえ、ワインも皆熱く燃えるような温度になり、多くは酸っぱく、悪臭を放つようになった。大量のワインが失われ、街頭に廃棄された。主の奉獻の祝日（2月2日）が過ぎ去るまで、寒気は全く訪れず、氷も全く張らなかった²⁸。

それから、王に暇を許されて、アヴァール候と主馬頭²⁹はイングランド王国へと帰途についた。彼らには、金貨や金銀食器のような素晴らしい土産物が贈られた。さらに、ワイン代を支払ってでもイングランドに持ち帰るのが良いと思われるよう、王はフランスの地方で彼らにワインを自由に飲ませるように、との公布をパリで出させた³⁰。

1475年1月³¹にはトランペットの音が響き、パリの四つ辻では、国王陛下の王令公開状が公布されたが、その内容は、かなり昔からフランス諸王に教皇教父によって許可されていたように、五年毎にフランス王国の高位聖職者全員で会議を開き、教会の改革と必要案件を取り決めるように、とのことである。長期間会議は開催されていなかった。[...] この公布の後、王は以前と同様に王の案件に幾ばくかは役立ち、王国の必要性から、王国外に持ち出されるワインの各大樽（約400リットル）につき1エキュ税金を徴収する、との内容を新たに公布させたのであった。[...]（王国向けの）1エキュの援助金は、各ワイン大樽に対するの

²⁶ *Ibid.*, p. 418. 前文から1472年6月27日頃とみなされる。

²⁷ *Ibid.*, p. 423.

²⁸ *Ibid.*, p. 436-437.

²⁹ アヴァール候と主馬頭は、イングランド王エドワード4世が、1475年ルイ11世との平和交渉を託したイングランド諸侯である。

³⁰ *Chronique scandaleuse*, éd. Petitot, t. 14, *op. cit.*, p. 14. 1475年のことである。

³¹ 復活祭の期日算定による。

みで他の商品から徴収されることはなく、新たに王国の隅々まで課せられたのである³²。

その後、彼ら（＝王国軍とシャンパーニュの司令官アンボワーズ）は拠点を構えようとボーヌ市の正面まで行き、それ以来しばらく、1478年の7月初めまで駐留した。その年には、ボーヌ市は王に降伏し、シャンパーニュの司令官の手中に入った。生命も財産も無事だったので、ボーヌ市は敗北の代償として罰則金という形で4万エキュを支払うことにした。さらにパリの商人や王国内の他の商人たちに負債があったに違いないワイン全てと、他の借金を返済することを余儀なくされた。それは、ボーヌ市によって売られたが発送されなかったワインや、彼らに貸し付けされた金銭などである。戦士達については、この降伏により、彼ら自身の生命も財産も無事なまま、自由裁量により、平和裏に退却したのだった³³。

3 :

パリの占星術師が真実を述べていたとしたら、木材はさらに高値になっていただろう。なぜなら、彼らはこのような強烈な氷点下の季候は（1480年）3月8日まで続くだろうと述べていたからである。3週間雪解けは早まったが、雪解け以後も天気は5月を迎えるまでかなり寒かった。それゆえ、早々に発芽していたブドウの芽は、多くが枯れるか、霜の害に見舞われてしまった。木々の花や、各地に植えられた株も枯れるか、霜の害に見舞われてしまった³⁴。

その年1481年には、ブドウ畑はフランス王国全土でほぼ全滅であり、僅かな収穫しかもたらさなかった。この年に収穫したワインは、価値はほとんどなかったが、高値で売られた。そのため、やはり価値がほとんどなかった前年のワインはかなり高値で売られた。と言うのも、この年の初頭には小売りや居酒屋で1パイント（液体の旧単位、約0.93リットル）トゥール鑄造硬貨4ドゥニエでしか売られなかったワインが、トゥール硬貨12ドゥニエで売られるようになったからである。パリ市の一部の豪商や、シャンピニー＝シュール＝マルヌや近郊地など、パリ周辺の銘醸地産ワインを保管していた地方の商人によってワインはまさに高値で売られたのだった。なぜなら、多くの商人はこうしたワインを小売りで1パイントがパリ鑄造硬貨2スー、1ミュイはトゥール硬貨36リーブルで売ったからである。前述のようにブドウ畑がほぼ全滅であったのと、そのワインも価値がほとんどなかったために、多くの商人が様々な遠隔地まで良質なワインを探しに出発したのであった。商人達がパリ市に持ち帰ったワインは同じように高値で売られた。1パイントが、6、7銀貨といった具

³² *Chronique scandaleuse*, éd. Petitot, t. 14, *op. cit.*, p. 31-32.

³³ *Ibid.*, p. 76-77.

³⁴ *Ibid.*, p. 96.

合である。こうしたワインは、スペイン都市の国境近くまで探し求めに行って得られたものであった³⁵。

(1483 年) 4 月に、イングランド王エドワード (4 世) が脳卒中に懸かって王国で亡くなった。王 (= ルイ 11 世) が贈ったシャイヨの銘醸地ワインを飲んでいる時に毒を盛られたのではないか、または大量にこのワインを飲みすぎたので亡くなったのだ、という者もいる。ここまでの言われようは、後継ぎに自らの長男を王に指名するまで生きたからである³⁶。

³⁵ *Ibid.*, p. 98-99.

³⁶ *Ibid.*, p. 113.